

フランソワ・エラン著 林昌宏訳

『移民の時代—フランス人口学者の視点』

明石書店, 2008年9月, 151p

フランスの人口問題といえば、2008年に2.02を記録した出生率の動向が有名だが、移民をめぐる様々な話題も、フランス社会では長年注目されている。移民の二世らによる2005年の暴動、サルコジ大統領の移民に関する発言などは、日本人の記憶にも新しいだろう。本書は、この移民の問題について、フランス国立人口研究所の現所長が一人人口学者としての立場で解説した本である。原題 (*Le temps des immigrés: Essai sur le destin de la population française*) にあるとおり、本書は一般読者向けのエッセイである。しかし、統計データを使った解説は良質で、研究を職とする者にとっても面白い読み物となった。

本書では、移民問題に関する著者の考察が、2006年に制定された移民に関する法律を軸に展開されていく。著者によれば、フランスでは「国の出生力のレベルによっては移民が余分になるとする考えや、国家の主権をきちんと保つ政策とは我々の子どもに、我々の社会的再生産における移民の役割が二次的、あるいは最低限にとどまる国家を継承していくことであるとする考え」が主流らしい。そして2006年には、移民の量的管理（実質的には移民の純移動数の減少）を目標とする法律が制定された。著者はこの法律の背景に移民排斥主義や（人口変動に対する）国家主権主義があると考え。そこで、著者いうところの「偏見と狭い視野」からの「解放」の道具である人口学を用い、法律の背後にある考え方の問題を検討していく。本書が取り上げる話題は、他国の移民政策、フランスにおける移民の純移動数や出生率、高齢化、人口の将来推計などだが、検討の結果は興味深い。著者はいう。移民の選別と量的削減を狙った政策は、30年前のスイスでも、主に「家族呼び寄せや庇護請求に関する国際法の遵守を強いられたことにより失敗した。フランスの出生率が高いが、平均寿命の伸びと大量のベビーブーム世代の存在により、自然増減は近々必ずマイナスになる。将来、フランス人口の増加は移民によってのみ実現される。本書の最後で、著者はフランス人と外国人の「混合」は進むと述べ、今後は「主権」の喪失を残念がるより、移民割合の増加に対して積極的に準備していくのが望ましいと結論づけている。

本書はフランスの、フランス人による、フランス人のためのエッセイなので、日本人には分かりにくい箇所もある。しかし、外国人の目を意識した外国人向けの本ではないが故に、問題をとりまく現地の雰囲気より直接的に伝えてくる。本書を読んで、評者は移民問題において事実を事実として客観的に捉えることはきわめて難しい、と改めて感じた。日本でも、社会的コストを無視して外国人労働者の導入を求める人、強烈な民族意識から外国人の流入に反感をもつ人、様々である。背景には政治的・経済的利害や、国や民族のアイデンティティの問題がある。しかし、国の将来を真剣に考えるなら、現実を直視し、色々な可能性の長所・短所を客観的に議論していくことは常に必要だろう。日本では、国全体や各地域で外国人人口が将来どの程度になるかといったことすら、十分検討されていない。人口研究者にも、まだできることがある。ただ、他方では、研究の役割が限定的なことも事実だ。無関心な人間に関心を持つと強要はできない。自国の高齢者が立つ前で、シルバーシートに座る非高齢者のことをたまにきく。ならば他国出身者の問題に関心を持つ人など果たしてどのくらいいるのか。が、この気分もきっと歳のせいだろう。偏見と闘うのは難しい。 (清水昌人)